様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２６２０
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６６７１０２２

研究課題名（和文）地域医療連携「理念」から育つIPEモデルの構築

研究課題名（英文）Development of an IPE Model based on the Idea of Collaboration with community Health Care

研究代表者
小川　典子（OGAWA, Noriko）

順天堂大学・保健看護学部・先任准教授

研究者番号：３０６２１７２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　在宅看護は、超高齢社会の現代日本で発達すべき喫緊の課題であるが、学問体系として全国的教育への有効性を欠いている。ナイチンゲールの連携理念に則った保健医療福祉サービスの連携を在宅看護に実装した。病院中心の価値観で育った学生には病院の在宅療養移行支援から在宅での訪問看護へという保健医療福祉サービスの多職種連携を在宅看護実習に導入したIPEモデルが有効であった。病院から在宅へ、医療モデルから生活モデルへのパラダイム転換を効果的に経験でき、病院から継続する地域包括ケアシステムの現状と課題を体験することができた。

研究成果の概要（英文）：The development of home nursing is an urgent issue in Japan’s super-aging society. To address the effectiveness of such nursing as an academic framework to provide nationwide education, liaison in healthcare, medical, and welfare services was promoted through home nursing practice based on Nightingale’s idea. For students raised in a society attaching importance to hospital treatment, an inter-professional education (IPE) model was effective. which introduced multi-professional liaison systems used in healthcare, medical, and welfare services to home nursing practice involving transitional home health care to home-visit nursing care. The model enabled students to effectively experience a paradigm shift from hospital treatment to home care or from the medical to living model. They could also learn the current status and challenges of community-based comprehensive care systems to provide patient care without interruption even after discharge from a hospital.

研究分野：看護学

キーワード：在宅療養移行支援　IPEモデル　パラダイム転換　在宅看護実習　ナイチンゲール　地域医療連携　地域包括ケアシステム　多職種連携

１．研究開始当初の背景

（1）2013 年 9 月に 65 歳以上の高齢者が国民 4 人に 1 人の割合となった。高齢化による疾病構造の変化と医療需要の急増により、在院日数の短縮化が促進され、病院中心の医療は終焉を迎え、住み慣れた地域で生活を継続できる医療介護体制を目指した「地域包括ケアシステム」構築が地域医療の焦点となっている。2008 年の診療報酬改定「退院調整加算」の新設により医療機関における退院調整部門の設置が進み、地域医療連携による医療機関から在宅療養への切れ目のないケアの提供が実現されている。

19 世紀に在宅看護の理念を打ち出したナイチンゲールは、病院医療には限界があると脱病院化の考えを明確にしていた[1)]。申請者は 2000 年からの 10 余年間、ナイチンゲールの理論を生かした「より自由で元気になるような環境を確保できる」「病院とは似ていない家庭に似せた」（病院覚え書 1863）回復期ケアのための家庭的少人数デイサービスと訪問看護ステーションを開設し、訪問看護師および介護支援専門員として地域連携・協働の現場に携わりつつ、教育者として在宅看護論の発展に貢献してきた。しかし、日本においてはナイチンゲールの在宅看護理念に関する学問体系の社会的有効性の証明が実施に至らず、在宅看護の普及と社会実装が遅延している。

（2）現代の学問体系上の課題として、在宅看護実習はすなわち訪問看護実習であるという誤認識があり、看護実践の場の認識としても訪問看護ステーションと病院という看護現場２局化がある。病院中心の価値観で育った学生には、病院から在宅をつなぐ地域医療連携による在宅療養移行支援に焦点を当てた在宅看護教育が必要であり、地域医療連携プロセスを導入した在宅看護実習が有効であろうと仮説を立て、本学の在宅看護論では、医療機関の在宅療養移行支援から訪問看護活動への継続ケアに焦点を当てた在宅看護実習を計画し、第１回生から実施している。

２．研究の目的

（1）在宅看護は、超高齢社会の本邦で発達すべき喫緊の課題であるが、学問体系として高齢看護学の一領域論程度の位置付けにとどまり、全国的教育への有効性を欠いている。そこで本研究は、英国のナショナルヘルスサービスの原型と言われるナイチンゲールの理念に則った保健医療福祉サービスの連携を在宅看護に実装することである。現在の欧米の在宅看護には、ナイチンゲールの理念が受け継がれている。ナイチンゲールは、1893 年バッキンガムシャー州のエイルズベリー地区で健康伝道者 health missioner という新しい職種・新しい概念の看護師による連携理念を駆使した健康教育モデル事業を実践した。健康や衛生知識および技術を村の母親たちがヘルスミッショナーという新しい職種の看護師から直接学ぶ。看護師から村の母親へ、さらにその娘たちへ伝えられ、近隣へ普及する。女性たちが家族の健康を守る力を身につけ、その力量はその娘たちに伝えられ、いつかは村全体が健康を保持できるというモデル構想である。新しい職種の働きかけの第一歩は村人たちとの間に好ましい人間関係を築くことであり、また指導の結果は村人たちに態度の変容が見られてはじめて評価できる。村落を１つの単位として教育し、そこを供給源として、さらに近隣に拡大していく健康教育のモデル事業である[2)]。この試みが後の英国の保健訪問員 health visitor の原型となり、彼女の health nursing 理念をもとに米国のリリアン・ウォルドは public の一語を付け足して public health nursing という新しい概念を造り、新しい在宅看護の連携理念を生み出した。

この発展型の在宅看護理念を本学では在宅看護論に取り入れ、学内講義および演習において学生間で共有している。ナイチンゲールの在宅看護理念を本学の在宅看護実習に盛り込み、試行し、専門職者連携教育（IPE：Inter Professional Education）モデルを構築する。ナイチンゲールが言ったように教育の場すなわち供給源の役割としての大学教育を拠点とする看護教育は、地域を巻き込んだコミュニティケアモデルの前段階的検証として学術的意義をもつと考えた。

３．研究の方法

（1）ナイチンゲールの在宅看護概念の検証

19 世紀に生きたナイチンゲールが在宅看護をどのようにとらえていたのか、その看護の方法や実践についてどのように語っていたのかを彼女の原文からキーワードを抽出し、著作を横断した原文テキスト分析を試みた。在宅看護の概念の年代的推移が明らかになるようにテキストは 1851 年の処女論文から 1900 年の最晩年の論文まで彼女の生涯に渡って選び、在宅看護に関する言及の多いと思われる 27 著作を研究対象とした。在宅看護について語っているセンテンスをデータとして著作毎にテキストマイニング分析によって測定し、構造を立体的に可視化し、当該理念の普遍性今日性を実証する。

（2）ナイチンゲールの在宅看護理念を盛り込んだ在宅看護の IPE モデルの有効性の検証

研究デザイン：在宅療養移行支援という目には見えにくい学生の体験を浮かび上がらせる最適なデザインである質的研究法、また在宅療養移行支援導入による効果の検証を評価するために量的研究法を用いた。

研究協力対象者：在宅看護実習を終了した本学１回生で研究に同意した学生

研究データ： 実習記録様式「在宅看護実習全体のまとめ」および自記式質問紙調査「在宅看護実習振り返りアンケート」

実施方法：研究は、順天堂大学保健看護学部倫理委員会の承認（承認番号 25-06）を得た後、また学生の在宅看護実習の成績評価が提出された後に調査し、「在宅看護実習振り返りアンケート」を回収ボックスへ提出することをもって研究協力とした。
データ分析方法：実習記録様式「在宅看護実習全体のまとめ」をデータとして丹念に読み解き、内容分析し、学習効果に関するデータを抽出しコード化したものを類似性の観点からカテゴリー化した。さらにデータに忠実であるための客観性や信頼性・妥当性を確保するために、抽出した全データを対象にテキストマイニングソフト（Text Mining Studio vol.6.0）を用いて自然言語処理による統計的テキスト解析を行った。

2）学生全員が在宅看護実習を終了し、成績評価が提出された時点で行う自記式質問紙を用いた「在宅看護実習振り返りアンケート」の結果を解析ソフト SPSS Ver.22.0 を用いて実習での学習体験の有無、地域医療連携から訪問看護へのプロセスの理解について統計学的に検証した。

（3）**IPE モデルの構築**

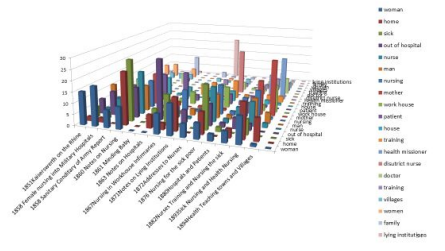
本研究の遂行プロセスは、ナイチンゲールの在宅看護の理念を検証し、さらにその理念を盛り込んだ IPE モデルの有効性を検証するという２つのレベルをテキストマイニング手法により概念構造を可視化し測定し、当該理念の普遍性を実証した。この成果を基盤にして在宅看護領域における学問体系の確立、古くて新しい在宅看護連携理念を組み込んだモデルの社会実装を実現する。

４．研究成果

（1）***ナイチンゲール在宅看護の概念の検証***

ナイチンゲールの主要 27 著作から在宅看護に関する 814 センテンスを抽出し、在宅看護の構成要素と考えられる主題を 15 のカテゴリーと著作毎の短文にまとめた。さらに在宅看護実践についての具体的な施策に関して今日に通用すると思われる５つの知見を得た。ナイチンゲールの在宅看護の概念をテキストマイニング分析によって測定し、構造を立体的に可視化し、当該理念の普遍性今日性を実証した（図 1）。

図1　単語頻度解析 Text Mining Studio vol.6.0



（2）**学生の記録の質的研究デザイン解析**

実習記録様式「在宅看護実習全体のまとめ」生データを丹念に読み解き、学習効果に関するデータを文脈ごと抜き出し、データに忠実にコード化し、640 コード抽出した。コード化したものを類似性の観点からカテゴリー化した。
①地域医療連携実習における学び：255 コードから 6 カテゴリーを抽出した.
②訪問看護ステーション実習における学び：385 コードから 10 カテゴリーを抽出した。

（3）**実習記録様式「在宅看護実習全体のまとめ」からテキストマイニングソフトを用いて（Text Mining Studio vol.6.0）自然言語処理による統計的テキスト解析**

①単語出現頻度解析結果
実習記録様式「在宅看護実習全体のまとめ」の生データから抽出した 640 コードを基にテキストマイニングソフトを用いて、地域医療連携実習の学びと訪問看護ステーション実習の学びについて単語出現頻度解析（図 2）を行なった。

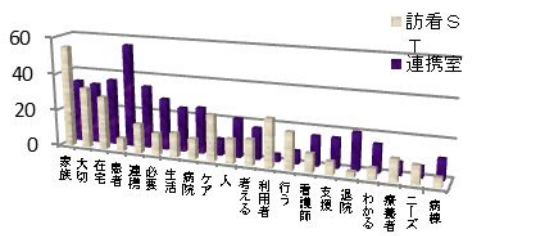


図 2 単語出現頻度解析

訪問看護ステーション実習では「家族」「大切」「在宅」「ケア」「利用者」「行なう」の順に単語が多くあり、家族による介護の実態やケアの重要性が焦点となっていた。一方地域医療連携実習では「患者」「在宅」「連携」「家族」「必要」「生活」という単語が多くあり、生活への視点は訪問看護ステーション実習より多く、むしろ生活への関心を向けていることがわかった。

②特徴語抽出解析結果

特徴語抽出解析により、属性（地域医療連携実習と訪問看護ステーション実習）毎に特徴的に出現する単語を抽出した。訪問看護ステーション実習においては、「工夫」「物品」「使う」「利用」という４つの言葉の指標が 1（属性＝全体）であり、訪問看護ステーション実習においてのみ使われていた。一方、地域医療連携実習においては、「退院支援」「退院後」「帰る」「退院調整看護師」「ナース」「具体的」「その人らしい」「調整」「入院中」「さまざま」「自己決定」「目的」という 12 の言葉の指標が 1（属性＝全体）であり、地域医療連携実習にのみ使用されていた言葉であった。

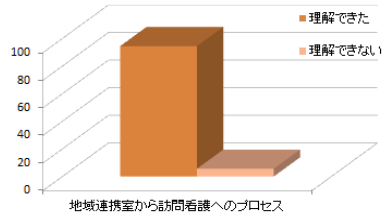
（4）**「在宅看護実習振り返りアンケート」の**

量的研究デザイン解析

実習での学習体験の有無と地域医療連携から訪問看護ステーションへのプロセスの理解との関連について、クロス集計およびカイ二乗検定をおこない、調整済み残差分析により検証した。有意水準 $p<0.05$ の項目は、地域医療連携実習での社会資源の実際($p=0.029$)、多職種連携の場面($p=0.004$)、家族支援の場面($p=0.037$)と、訪問看護ステーション実習での多職種連携の場面($p=0.058$)で、学習体験ありの学生は、地域医療連携から訪問看護へのプロセスが理解できた割合が有意に高かった（表1）。

表1 在宅看護実習全体のプロセス理解(n=107)

	理解できた	理解できない
地域連携室から訪問看護へのプロセス	94.4%	5.6%



（5）**考察および結論**

量的研究解析結果から、医療機関における在宅療養移行支援に焦点をあてた地域医療連携実習と訪問看護ステーション実習を組み合わせた本学の在宅看護実習において、多くの学生は社会資源の実際や多職種連携の場面の実習を体験していた。また、地域医療連携から訪問看護へのプロセスの理解についても9割以上の学生が理解できており、本学の体系的な在宅看護実習は有効であると思われる。また、地域医療連携から訪問看護へのプロセスの理解は、地域医療連携実習および訪問看護ステーション実習における学習体験の有無と関連があり、特に地域医療連携実習での学習体験として、社会資源の実際、多職種連携の場面、家族支援の場面および訪問看護ステーション実習における多職種連携の場面の体験の有無がプロセスの理解と関連していることから、地域医療連携実習を含む本学の在宅看護実習の意義は大きいと考える。

質的研究解析結果から学生の言葉を丹念に読み解いていくと、地域医療連携実習における多職種との連携・協働による目的を一致させた退院支援・退院調整を見学することによって、学生たちは「自分の考えていた退院支援ではまったく足りない」ことを実感した。ケアマネジャーや在宅医師さらにその他の専門職者らと連携・協働する訪問看護師の活動や家族支援の実際を知ることで「患者」から「生活者」としての個人を尊重するための「誠実さ」を学び、在宅療養における「長い時間をかけて信頼関係を築きながら、ケアを生活の内に溶け込ませていく」必要性を実感し、地域ケアシステムの現状と今日的課題を生きた体験として習得していた。多職種連携の実際を学生のうちからしっかりと見てくることによって、学生たちは多職種との連携の必要性、「看護だけでは不十分」という他専門職種を尊重する姿勢など多くを学ぶ機会となっている。

地域医療連携実習においてのみ使われていた言葉のなかでも特に「具体的」「その人らしい」「自己決定」という言葉は「医療モデルから生活モデルへ」という意識転換をするためにとりわけ重要なキーワードである。「具体的」な支援や「その人らしい」支援が退院支援に必要であるのはもちろんであるが、とりわけ「自己決定」「意思決定」という概念は在宅療養移行時における条件整備に必要不可欠な概念である。自然言語処理による統計的テキスト解析テキストマイニングの単語出現頻度解析や文章分類解析からは訪問看護ステーション実習における「家族による介護」の実態や「ケアの重要性」が焦点となり、在宅でのケアとその家族の介護負担に学生の視点が集中してしまい、視野が狭まってしまう恐れがあることが検証できた。訪問看護ステーションのみの実習を在宅看護実習とする従来の実習形態では、病院看護と在宅看護という2局面を考え、対峙する形で訪問看護を見てきてしまう恐れがある。将来病院勤務を希望している学生にとっては自分とは関係ない別の場所での別の看護という印象を持ちかねない。地域医療連携実習の「目には見えにくい多職種連携」をしっかりと意識して見てくることによって、訪問看護ステーションの実習も他人事ではなく継続する看護プロセスとして病院から在宅への一連の関係性を見て取ってくることができるのである。病院と地域の双方から目的を1つにした多職種連携による在宅療養移行支援を計画的に体系的に体験することによって地域医療における多職種連携教育（IPE）を体験することができる。

「退院がゴールではなく、患者の生活は退院してからも続くという当たり前のことが初めて理解できた」「これまでの学習すべてが繋がった」と病院医療から続く在宅医療への意識変革が本実習を通して体験できることが検証できた。病院中心の価値観で育った学生の在宅看護に対する意識を変える教育効果を得ることができたと考える。

1週目の入院患者の在宅療養移行支援における退院カンファレンスに集まった在宅医師や訪問看護師らが、そっくりそのまま2週目の訪問看護実習の指導メンバーであるという、まさに文字通りの「医療モデルから生活モデルへ」を学生が体験する機会も増えている。20世紀という時代の産物である「病院の世紀」が終焉を迎え、「地域包括ケア」の時代は既に始まっている。ナイチンゲールは、「病院は文明の中間段階である」と述べ、急性期の必要な時期が過ぎたならば、一日も早

く脱病院化および脱施設化が必要であり、それに取って代わって、その人の家での理想的な看護が2,000年には始まっているだろうと既に19世紀に予見していた[3)]。これからの日本の地域包括ケアシステムの主要な担い手は訪問看護師であると予測されている。訪問看護師は病人の看護ばかりでなく、病人を在宅で介護している家族とその生活の場に入っていき、病院とは別の方法で生活に寄り添い、現実を見据えた切れ目のない医療を続けていかなければならない。ナイチンゲールは訪問看護師の実践力、訪問術、教育力の必要性を強調し「教えているようには見せないで教えていく[4)]」必要を語り、看護をサイエンスとアートであると定義し、治療中心のサイエンスと人々の生活や人生を創造する独創的なアートの両面を持つと考えていた。学生たちの記録から取り出したカテゴリーは【訪問看護師には、幅広い知識や教育、さらに頭の柔軟さ、工夫、独創性が必要】【訪問マナーや誠実な態度によるコミュニケーションで信頼関係を構築】【生活スタイルを尊重してケアを生活に溶け込ませていく】【家族支援は、その家族の人生に介入する責任を伴う】と150年前のナイチンゲールの理念と共通する言葉すなわち生活モデル概念であった。

平均在院日数の短縮化により、ケア内容はますます高度化・多様化し、病院と在宅をつなぐ要となる退院調整看護師および訪問看護師には今後ますます高度な専門性が要求される。学生は、病院からの在宅療養移行支援体験によって、「病院から在宅へ」「医療モデルから生活モデルへ」のパラダイム転換を効果的に経験できるばかりでなく、病院から切れ目なく連携継続する地域包括ケアシステムの現状と課題を体験することができる。地域医療における多職種連携教育モデル（IPE モデル）を体験することができるのである。訪問看護ステーションの看護、保健師による公衆衛生看護、地域の高齢者施設における高齢者看護という縦割りの領域実習の学習理解を統合するプロセスとして医療機関の地域医療連携における在宅療養移行支援の学習は今や不可欠の課題であり、医療機関から在宅療養へという現代医療の中心課題である在宅療養移行支援を学ぶことは、看護教育のパラダイム転換に有効であると考える。

＜引用文献＞

1）小川典子：ナイチンゲールにおける在宅看護の概念，看護研究，30(1),63-75，1997.
2）ナイチンゲール（1894）：町や村での健康教育、小玉香津子・薄井坦子・田村真訳；ナイチンゲール著作集2、現代社、1974.
3）小川典子：フロレンス・ナイチンゲールが描いた 21 世紀における在宅看護、順天堂保健看護研究、4,1-12,2016.
4）Nightingale, F. :Introduction to the ‘History of nursing in the homes of the poor’, 1890:William Rathbone

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　4　件）

1．小川典子・藤尾祐子・岩清水伴美・美ノ谷新子：在宅療養移行を導入した在宅看護実習における IPE モデルの検証―医療モデルから生活モデルへのパラダイム転換―、順天堂保健看護研究、5（1）、28-40、2017．（査読有）

2．Noriko OCAWA: Home Nursing in the 21st Century Conceptualized by Nightingale, International Journal of Nursing & Clinical Practices, pp1-8, 3:95, 2016. http//dx.doi.org/10.15344/23944978/3:195（査読有）

〔学会発表〕（計　5　件）

1．小川典子・藤尾祐子：在宅療養移行支援を導入した在宅看護実習の有効性、第 17 回日本赤十字看護学会学術集会、2016 年 7 月 2 日、日本赤十字北海道看護大学（北海道北見市）（査読有）

2．小川典子：ナイチンゲール著作のテキストマイニングから学ぶ－在宅看護についての今日に通じる具体的な施策－、第 5 回日本在宅看護学会学術集会、2015 年 11 月 22 日、聖路加国際大学（東京都中央区）（査読有）

〔図書〕（計　1　件）

1．小川典子：医療モデルから生活モデルに焦点を当てた“在宅看護”実習の展開、pp44-53：清水準一・柏木聖代・川村佐和子編集：教員・訪問看護師・学生すべてが活用できる在宅看護の実習ガイド、日本看護協会出版会、2017.

６．研究組織

(1)研究代表者

小川　典子（OGAWA, Noriko）
順天堂大学・保健看護学部・先任准教授
研究者番号：30621726

(2)研究分担者

藤尾　祐子（FUJIO, Yuko）
順天堂大学・保健看護学部・准教授
研究者番号： 60637106

岩清水　伴美（IWASHIMIZU, Tomomi）
順天堂大学・保健看護学部・先任准教授
研究者番号：60516748

(3)　連携研究者

（　　）

(4)研究協力者

小玉　香津子（KODAMA, Kazuko）